

曲目解説

北爪 裕道

点描と影 (2017) ～ ギターとライブエレクトロニクスのための

パリでIRCAM（フランス国立音響音楽研究所）に在籍していた、2017年に制作・初演した作品。

ギターとエレクトロニクスのための曲を書くにあたり、ギターという楽器の特徴を考えた。

まずこの楽器は、（少なくとも慣習的な奏法において）音を伸ばすことはできない。この「制約」から私は、様々な「点描的」音楽表現によって曲を構成することを考えた。また一方で、その音色的特徴も興味深かった。ギターの音を電子音響技術によって分析・処理しながら、（特にアタックの瞬間に多く含まれる）金属的ノイズ成分や純音成分などに分解して扱うことを考え、フレーズやセクションを構成した。結果、電子音響パートはもちろん、ギターの演奏法も幅広い音色を含むことになった。一方で、ある種「チープ」にも聞こえるギターの特徴的な音色は、私にアイロニックな表現を連想させた。

ストライプ状の空間 (2014) ～ 電子音響のための

この作品はほぼ全てが、録音された様々な「アタック」素材（木を叩く音、水滴を垂らした音、紙を素早く破る音、トライアングルやシンバル等の打楽器、ピアノの単音またはクラスター等）から構築されている。それらを超高速で反復させたり、何十倍もの長さに引き伸ばしたり、あるいは組み合わせせてリズムパターンを形成することによって時間的持続が作られ、曲が構成されている。

最終部で登場するバウンドするようなジェスチャーは、アタックの反復「速度」とそれを速めた結果生まれる持続音の「音色」「音高」間の変化の連続性を現出させる試みでもある。またその後景にはジャン＝クロード・リセの作品から発想を得て試みた「無限上行」テクスチャーが置かれている。

エキヴォック (テオ・メリゴー作曲、2017) ～ 自動演奏ピアノと電子音響のための

テオ・メリゴー（Théo Merigeau, 仏1987-）の作品。タイトルの「équivoque」はフランス語で、不明瞭、あいまいな、どうとでも解釈できる、という意味をもつ語である。

自動演奏ピアノの中にはEbow（イーボウ、エレクトロニック・ボウの略）という振動電流による磁気で弦を振動させる小物が4つ、弦の上に置かれている。ピアノに弾かれた音はこれによって振動させられ、音が伸びていく。

ダンス・ダトム (2015) ～ サクソフォンと電子音響のための

曲はサクソフォンによる上行グリッサンドの一撃から始まり、その余韻の中から複数のピッチが電子音響パートにキャプチャされ、保続音となる。その後、保続音はサクソフォンの様々なアクションからの干渉・影響を受け、徐々に粒子化、さらに、波打ち始める。それらのプロセスを経て音楽はやがて踊り出す。

小さな間奏曲 (2021) ～自動演奏ブリペアドピアノのための

本公演の曲目構成を相談中、演出家の桑折さんより、1分程度の自動演奏ピアノ・ソロの静かな曲をというご提案をいただいた。

自動演奏ピアノのレパートリーは派手な表現のものが多いが、そうではない自動演奏ピアノならではの表現で、この短い時間を構成しようと試みた。

グラデーション (2012) ～ チェロ独奏のための

弓の毛で弦を擦るという擦弦楽器本来の奏法の中から引き出されるさまざまな音色に連続性を見出した。そしてそれは、その他のパラメータ（音色、音高、強弱、弓の速度などなど）の変化とも関わり合いながら、全体像としてのグラデーションを形成する。

2012年、山澤慧氏の委嘱により作曲し、同氏によって初演、そしてあちこちで再演が繰り返されてきた。

楽譜は全体に渡って、多分に奏者の感性に委ねる書き方がされているため、今回初めて他の奏者に演奏され、いままでは違った曲の顔、おもしろさが見えて作曲者としてもとても嬉しい。

自動演奏楽器群による前奏曲 (2020)

本公演のために制作した自動演奏打楽器と自動演奏ピアノ、そして光を発する装置を念頭にした作品。

<自動演奏ピアノのための小品（田村瞳実作曲、2021）より抜粋>

作曲者の東京藝術大学に在学中で、私の担当している授業を履修している。今年度、自動演奏ピアノによる作品の作曲に集中しており、前期末にその集大成として発表した作品から一部を抜粋して組み込ませていただくことにした。自動演奏ピアノならではの表現についてよく考えられ、ビジュアル的にも楽しめるものとなっている。

「チェルシー・カプリース (2016)」の素材による即興的間奏曲

英語のスピーチによる音素材を様々に加工したものが積み重なっていく。さらにそこへ自動演奏ピアノ、そして奏者たちも加わっていく。言葉には定量記譜の楽譜ではうまく表せない独特のリズムや抑揚がある。その重なりが独特の音空間を生む。

三色オペレーション (2014/2021) ～ サクソフォン、ギター、チェロ、自動演奏ピアノのための

2015年、フルート・ヴァイオリン・ピアノによる室内楽グループ「リレーション'70」の委嘱で、作曲した作品を今回の出演者のためにアレンジした。

曲中には3種類のジェスチャーA,B,Cが存在し、それぞれに音組織・リズム・律動などにおいて特徴づけられている。さらに各ジェスチャーには、「レギュラーな状態」と「イレギュラーな状態」が存在する。

全体は3部から成る。第1部ではジェスチャーAが、しばしばCの干渉を受けながら、レギュラーな状態からイレギュラーな状態へと徐々に推移する。第2部ではBが、AとCの干渉を受けながら、そして第3部ではCが、AとBの干渉を受けながらレギュラーからイレギュラーへ、といったように、概括的には3種類のジェスチャーが立場を入れ替えながら各部において同じようなプロセスを踏む、というシンプルな構造にみることができる。

Aは、同一音上に留まるジェスチャー。レギュラーな状態で静止または一定のパルスを刻み、イレギュラーな状態で不規則なパルスを刻む。Bは全音階による音組織上で上下運動を繰り返す、波のような音型。各パート、固定された周期でレギュラーな運動を続けるが、それらはしばしばイレギュラーに切断される。Cは、完全4度の堆積から成る和音上を、スタッカートの16分音符が移動するもので、規則的な上行を繰り返すものが「レギュラー」、不規則に飛び散るように移動するものが「イレギュラー」である（冒頭第1小節のジェスチャーはそれに当たる）。